俳句の修辞

1　五七五定型と自由律

「発句」については、乾裕幸による以下のような要を得た解説がある。「連歌・俳諧用語。最初は短歌の初五文字、のちに同じく上の句（五・七・五）をさしていったが、十七音節（五・七・五）の長句と十四音節（七・七）の短句を交互に付け連ねる連歌・連句が成立すると、その巻頭の長句を、第二句（脇句）以下の付句と区別して、発句とよぶに至った。短歌の上の句と違い、完結した思想を表現しなければならず、季の詞（季語）を詠み込み、切字を用いることが要請された。その点、今日の俳句と異なるところはないが、脇句以下の付句を予想して制作され、百韻なり歌仙（三六句）なりの一巻をリードするだけの格調の高さが重んじられた点で、一線を画する。やがて独立の詩形として自覚的に制作されるようになると、連句の第一句はとくに立句ともよばれ、発句は俳句とも称されるに至った。しかし俳句の名称が本質的な詩性の変革を伴って用いられるようになったのは、正岡子規による俳句革新運動以後である。」（小学館『日本大百科全書（ニッポニカ）』）。この近世の発句における「一巻をリードするだけの格調の高さ」への希求と、子規以降の「本質的な詩性の変革」が入り交じりつつ、今日まで俳句を俳句たらしめる「格調」の姿が模索されてきたと言えるかも知れない。もしそのようなものがないまま、形式上五七五で季語さえあれば俳句というならば、たまたまそう見える標語や言葉遊び、あるいは季語を俳句のように季語として意識せず一つの語として使う現代川柳などとの違いが何もないことになるだろう。ひとまず発句・俳句を通じ、五七五が基軸であるのは近代以後も不変であり、それが伝統的態度とされる一方で、「変革」の方へ大きく針を振った子規の弟子である河東碧梧桐らは、五七五定型を崩すことを厭わない「新傾向俳句」を提唱し、一時は俳壇を席巻した。やがてそれに批判的だった高浜虚子の伝統回帰運動で衰退したが、この新傾向俳句運動は後に中塚一碧楼や荻原井泉水らが主導した「自由律俳句」へとつながる。彼らは概ね五七五定型や季語の本意などの伝統的な約束事を、形式的な前近代の桎梏と見なして批判し、あたらしい時代の個人の表現の器にはあたらしいものが必要と考え、五七五定型と季語の働きとは違う個人の内部から表出される自然な律に基づく俳句を求めた。しかし、一行詩とも異なり定型俳句との緊張関係を前提とする自由律俳句は、世間に大きく広まるには到らなかった。現在では、概ね個人の不幸な生の有り様と作品がセットになって共感され人口に膾炙した尾崎放哉や種田山頭火、住宅顕信や、プロレタリア俳句の橋本夢道ら数名の作家が名を残すに留まる。また、そのような自由律俳句史の流れとは無縁のところで、又吉直樹やせきしろのような自由律の詠み手が新しく登場している。

2　季語と季感

季語は、それを詠み込むことでその作品内世界の現前性を示す働きが期待されるので、基本は作品内のいま、ここを示す役割をもつ語である。同時に、歴史的に培われてきた意味内容を伝承する働きをもつ語でもある。したがって、和歌以来の季節の詞を踏襲した「縦題季語」と、近世に新しく季語として取り入れられた「横題季語」、さらに明治以降の「新季語」に大別され、その季語

の本質的な内容を表す本意・本情があるとされる。

和歌以来の詠みぶりは尊重されるが、常に規範化、類型化と新しい詠みとのせめぎあいがある。著名な例としては芭蕉の代表句とされる「古池や蛙飛びこむ水の音」の上五が「古池や」に収まるまでの段階で、芭蕉の弟子である其角が「山吹や」としてはどうかと提案したとされる（各務支考「葛の松原」）件がある。其角の言は、山吹は水辺にあるものとして詠むという和歌以来の約束ごとを踏襲したものであり、芭蕉はあえて採らず、あたらしい詩境を求め「古池や」を置いたとされる。

和歌の題とは無縁のあたらしい季語ではそのようなことは起こりにくいように見えるが、たとえば、神野紗希「コンビニのおでんが好きで星きれい」（『光まみれの蜂』角川書店）は「おでん」が冬の季語であるものの、一般にコンビニエンスストアのレジの横で販売されるおでんは、季語「おでん」の従来詠まれてきた句のおでんらしさとは一線を画しているだろう。また、コンビニのおでんは冬だけの商品ではないので、その分季節感も薄い（星がきれいなことが冬の季節感を後押しはしている）。作者はそこに季語の現代性、新味を見出して作品化しているのであろう。

また、生徒に俳句を詠ませると、例えば〈花火したあのころの夏思い出す〉というように、季語「花火」や「夏」は詠み込んであるものの、思い出している今の季節が不明の回想形式で作品化する例が出てくるが、この句を夏の季節の句とするのは無理がある。つまり、季語はあるがその用い方がおかしいのである。同様に、絵や写真、映像など作品の中の季節の景物を詠んだ場合、現実の季感とのずれが生じることになる。

なお、本教科書中では、富沢赤黄男「蝶墜ちて大音響の結氷期」の「蝶」には季感がない（「富沢赤黄男」の解説参照）。金子兜太「彎曲し火傷し爆心地のマラソン」は、季語がないが、長崎の原爆投下の日がちょうど立秋とかさなることから、この句の季感を初秋と見る人もいる。

3　切れ字と切れ

もともと切れ字（切字）は、連歌において発句を脇句以下と明確に切り離し、一句で完結させるために用いられた。古来「切れ字十八字」（かな・けり・もがな・らん・し・ぞ・か・よ・せ・や・れ・つ・ぬ・ず・いかに・じ・へ・け〈「せ・れ・へ・け」は動詞の命令形の語尾、「し」は形容詞の語尾〉）がその代表とされる。その場合は基本、一句一章一物仕立ての句末および、一句中の倒置する切れ目に切れ字を用いる詠み方であり、この用法は近世の発句でも踏襲されたが、徐々に二句一章取り合わせの詠み方が現れた。二句一章の取り合わせにすると、内容から自動的に一句が途中で切れることになり、十八の切れ字の使用に拘束されなくなる。芭蕉はそれを念頭に「切字に用る時は、四十八字皆切字也。用ひざる時は、一時も切字なし」（「去来抄」）と述べていたと思われる。したがって、「切れ字」と分けて「切れ」という場合、二句一章における意味の切れ目で、いわゆる切れ字が用いられていないものを言うのが基本と見るべきであるが、句によっては読点のような意味の切れ所が複数ある場合があり、読み手で解釈が微妙に変わるポイントともなってくる。

（橋本　直）